

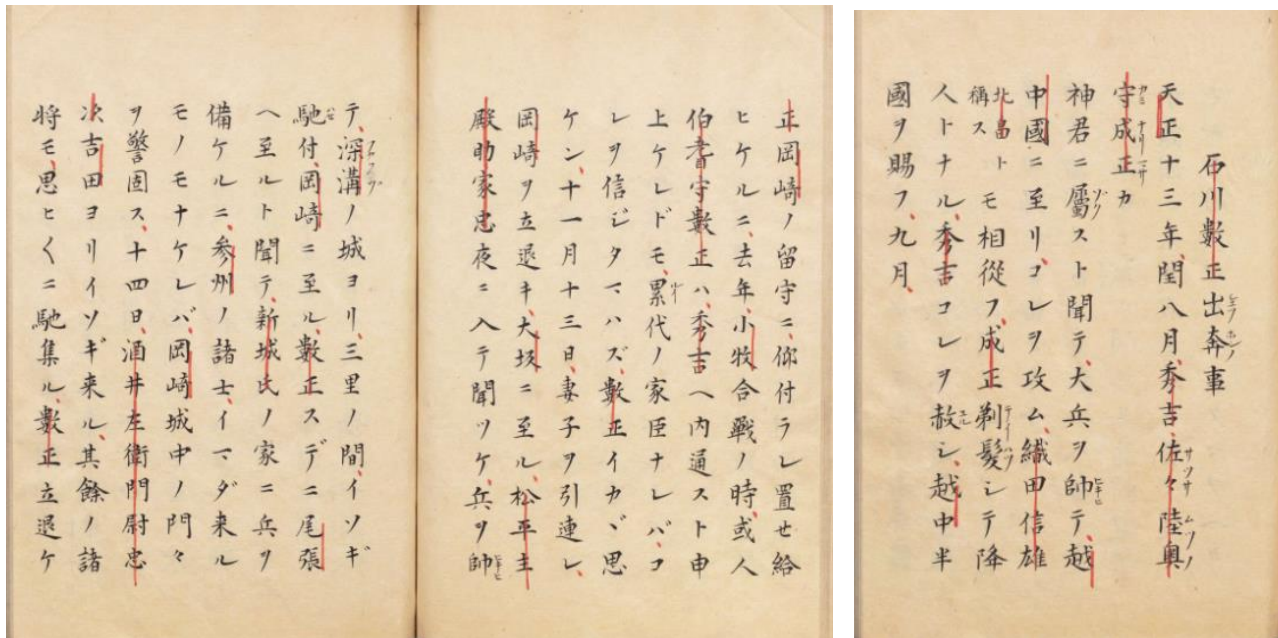
# おもシロ！城郭つうしん 第10回

ぶとくたいせいぎ こくりつこうぶんしょかんぞう  
武徳大成記 (国立公文書館蔵)

## <石川数正出奔の事>

大河ドラマ「どうする家康」もだいぶ話が進みまして天正時代に入りました。石川数正の出奔が天正13年(1585)11月13日ですのでだいぶ近づいてきています。NHKがどのようにこの出奔を描くかについては興味津々ですね。

今回は『武徳大成記』に書かれている「石川数正出奔の事」を紹介しましょう。『武徳大成記』とは、江戸時代の貞享3年(1686)に完成した書物で、江戸幕府が、松平氏の始まりから徳川家康の一生のできごとや功績を書いたものです。その中に「石川数正出奔の事」という記事があります。18ページにもわたって書かれていまして、石川数正の出奔について江戸時代前期の幕府の側(徳川側)からみた解釈のしかたがわかり、これも貴重な史料です。



文中の数正出奔の記述を原文の通り紹介しましょう。小牧合戦とは家康と秀吉の戦争です。「この時、数正は秀吉と内通していたとある人が申し上げた(家康へ)けれども、家康は数正が代々の家臣であることからとそれを信じなかった。11月13日数正は妻子を連れて岡崎を出て大坂に至った」と書かれています。このほかに文章全体を通して数正の出奔にかかわってどのようなことが書かれているかを紹介していきたいと思います。

「家康は家来たちを集めて、秀吉へ人質を出すべきだろうか、と試みに質問をした。家来たちは、今諸国の大名は我も我もと人質を出している、これと同じようにしてはなりません、と申し上げれば家康ももとより思っていることだ

去年、小牧合戦ノ時、或人伯耆守数正ハ、秀吉へ内通スト申上ケレドモ、累代ノ家臣ナレバ、コレヲ信ジタマハズ、数正イケン、十一月十三日、妻子を引連レ、岡崎ヲ立退キ、大坂ニ至ル。

と言って、人質を出すことをやめた。」

「数正は家康のお使いとして、しばしば秀吉のもとへ行っていたが、秀吉が家康に京都へ来るようにときそってもそれに従わなかった。三男はすでに人質に行っており、次男の勝千代も去年秀康のお供をして大坂にいた。このことから数正は岡崎から退いて秀吉の家来となった。」などと書かれています。

以上みてきますと、小牧合戦（小牧・長久手の戦い）で数正は秀吉とひそかに内通していたというわけがあり、そんななかで数正は岡崎城の城代でありながら出奔をして大坂（秀吉のもと）へ行ったこと。家康は秀吉からの人質の要求を受け入れなかったこと。数正は家康の使いとして秀吉のところへ行き来していたが、秀吉が家康に京都へ来るように誘っても来ないことへの不満を伝えたこと。そのときはすでに次男と三男を秀吉に人質を出している数正はついに岡崎から退いて秀吉の家来となったこと。というのが、『武徳大成記』の見方です。

家康が人質の要求を断ったというのは、第9回でみました秀吉の真田昌幸への手紙の内容と一致しています。数正が秀吉と内通していたというのは、確かに家康の使いで秀吉のもとへ訪れていたという事実があります。このように家康と秀吉の間にたって、秀吉に内通した・しない、人質を出す・出さない、京都に上る・上らない、秀吉に数正は人質を出しているなどのことから板ばさみになってしまったという解釈ができそうです。

秀吉のもとへいった後のことについて、次のように書かれています。

「石川数正は、秀吉のもとへ行って、ごほうびをもらい待遇が良いと思っていたが、そのようなことはなくて、主人を捨てた人だからといろいろな人がうわさをし、また住居の門にあざけりの歌（狂歌）を書き付けて笑ったりしたので、出仕もできないまま日々を送っていた。」

思いもよらず冷たい扱いを受けていたとしています。数正が出奔した後、三河の国の各城主たちは浜松（家康のもと）へ人質を上げる者が多かったと書かれています。

以上はあくまでも出奔された徳川方の視点で書かれているので、そのまま事実としてうのみにすることはできません。大河ドラマ「どうする家康」でもどちらかの視点で描かれると思います。だからと言ってそれを事実として受け取ることはできません。

さまざまな憶測がありますが、参考までに数正が一番そばにいた家康の長男信康にかかわっては次のような説があります。

- ・信康の後見人を務めていたため、天正7年（1579）の信康切腹事件で家康と不仲になった。
- ・信康切腹のあと、徳川家の実権が数正を中心とする岡崎衆（信康派）から酒井忠次らを中心とする浜松衆（家康派）に移ったため、数正は徳川家中で立場が悪くなった。

どれもこれもありそうな説だとは思いますが、残念ながらそれを決定づける資料がないのが現状です。中には家康のスパイとして秀吉のもとへもぐり込んだという説もあり、さまざまな視点から語られています。一番重要なのはやはり数正の気持ちだと思うのですが、それは現在でも謎のままです。

今回は実際に「どうする家康」で数正の出奔とその時の数正の気持ちがどのようにとらえられているかを観たうえで、ふたたび語ってみたいと思います。